

多感覚知覚と「食べる」・音環境と「聞く・遊ぶ」 —知覚研究と保育実践を結ぶ

企画者: 日本赤ちゃん学会保育環境部会

代表 嶋田 容子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)

座長: 志村 洋子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)

話題提供者: 嶋田 容子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)

増山 美枝 (河合学園かわい幼稚園)

和田 有史 (立命館大学)

飛石 希 (カゴメ株式会社 野菜を好きになる保育園ベジ・キッズ)

指定討論者: 山口 真美 (中央大学)

企画趣旨

嶋田 容子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)

日々変転する保育の場において、保育に関する「エビデンス」を、具体的な生活の形にするのはなかなか難しいものです。研究の示唆する事実をどのように保育の日常に吸収することができるのか等、フロアからもご意見をいただきながら、自由に議論したいと考えています。

知覚研究と保育実践を結ぶ試みは本年度が2回目となります。昨年度のラウンドテーブルでは研究者が登壇してフロアの保育者・研究者から意見をいただく形でしたが、今回は、「食」と「音」をテーマに研究者1人・保育実践者1人が順に登壇します。まず「食」について、味覚・嗅覚をはじめとする乳幼児の多感覚知覚についての知見を、研究者から報告します。そして、それを踏まえ「好き嫌い」に対する取り組みへとつないだ実践について、保育実践者が報告します。次に「音」について研究者から、乳幼児の聴覚特性と、保育の音環境が子どもに及ぼす影響について、報告します。そして共同研究者でもある保育実践者からは、保育の変化と音環境との関わりについて報告します。

今回登壇する研究者・保育実践者は、これまでも互いの意見を交換したり、保育環境の調査・改善活動を一緒におこなったりと、協働の機会を重ねてきました。赤ちゃん学会ならではの領域を越えた議論を通じて、互いの観点の相違についても理解を深める場になればと願っています。

話題提供者1

乳幼児期の食の認識

和田 有史 (立命館大学)

人間は食物を五感によって味わう。その嗜好は先天的な部分と、生活の中での学習によって獲得する部分の両者がある。先天的な嗜好が顕著に表れるのは味覚である。また、新奇な食物を警戒する傾向

が備わっている。その一方で人間の匂いに対する嗜好は学習に依存するところが大きい。今回は乳幼児期における食に関わる多感覚知覚の変化と選好について話題提供する。

話題提供者 2

『野菜を好きになる保育園ベジ・キッズ』の取り組み事例の紹介

～0-2歳に体験を通して野菜と共に育む環境を提供～

飛石 希 (カゴメ株式会社 野菜を好きになる保育園ベジ・キッズ)

乳幼児期に形成された食習慣は成長後にも影響するため、乳幼児期の子供が野菜好きになることは成長後の野菜不足防止に繋がると考えられる。当社は2019年に野菜を好きになることをコンセプトとした保育園を開園し、「野菜に親しむ」ための施設・カリキュラム・献立の提供や運営を通して、保育児童やその保護者の変化や影響など気づきを得ることが出来た。カリキュラム概要と効果や得られた気づきについて紹介する。

話題提供者 3

乳幼児期の聴覚・遊びと音環境

嶋田 容子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)

乳幼児の聴覚は成人とは異なり、雑音の多い環境で言葉や必要な生活音を聴き取ることが難しい。にぎやかな音環境が幼児の言語発達や意欲などに負の影響を与えることが、先行研究により示されている。本研究では、実際に保育室に吸音材を取り付けて音環境を変化させ、その前後の自由遊びの変化を分析した。その結果、小集団形成などに変化がみられ、遊びへの影響が示唆された。音環境改善への具体的な提案も併せて、話題提供する。

話題提供者 4

保育の変容と音環境の変化について

増山 美枝 (河合学園かわい幼稚園)

当幼稚園は、以前は保育者が主導の一斉活動を主とする保育を行っていた。しかし現在、子ども一人一人の興味・関心に基づいた活動を援助する、子どもの主体的な活動を主とした保育へと変える取り組みを、現場の保育者が中心となって行っている。そんな中、保育者が保育の場における音環境を意識する機会があった。そして、保育者が音環境に対して意識を向けることと、子どもが主体的に活動する保育の実践は、相互にかかわりあっていることがわかった。